

戦前の県庁は、用事のない人が気軽に近付けるところではありませんでした。周囲が堀で囲まれていることは、それを象徴しているようにも見えます。

こうして、昭和初期まで県庁敷地として管理されたおかげで、周囲が埋め立てられることもなく、旧本丸と西之丸部分は、富山城の面影を残す唯一の空間として残されることになったのです。

* * *

明治という新しい時代の到来により、旧体制に関わるものは、無用のものとして破壊されていく流れにありました。「城郭」もその1つです。これまで見てきたように、富山城もその多くが解体—破壊—され、遺構は失われていきました。一方で、解体は大きな“空き地”の出現を意味します。ここに新たな建物や道路が造られ、近代的な街づくりが次々と進められていったのです。富山城址は、新時代の到来を最もよく感じることができる場所となりました。



大正時代中期、城址付近の航空写真です。城址の東側上空から撮影しています。県庁敷地は堀に囲まれ、そのほかの地域には多くの家並みが見えます。中央が県庁、右側が神通川です。(P2の地図参照)

それでは次に、唯一残された旧本丸・西之丸のその後を見てみることにしましょう。解体が新しい街づくりにつながっていた時代から、残された遺構を史蹟として保存しようとする動きが出てきます。